



TITLE:

滿州大豆の發展

AUTHOR(S):

江頭, 恒治

CITATION:

江頭, 恒治. 滿州大豆の發展. 經濟論叢 1940, 51(3): 372-382

ISSUE DATE:

1940-09

URL:

<https://doi.org/10.14989/131434>

RIGHT:

京都市帝國大學經濟學會

經濟論叢

第十五卷第三號

昭和十五年九月

論叢

スミスとリスト

經濟學博士

堀

經夫

經濟變動と財政

經濟學博士

沙

見三郎

時論

經濟に於ける統制と體制

文學博士

高田

保馬

研究

元史食貨志に見はれたる貨幣思想

經濟學士

穗積

文雄

統制組織と問屋金融

經濟學士

田

杉

競

原始教團の共同性

經濟學士

澤

崎

堅造

說苑

橋本左内の經濟思想

經濟學博士

本庄

榮治

郎

滿洲大豆の發展

經濟學士

江

頭

恒治

附錄

彙報

外國雜誌論題

滿洲大豆の發展

江頭恒治

一 滿洲大豆の起源

大豆の原産地は東亞大陸の南部地方といはれてゐるが、支那でも早くからその栽培が行はしものゝ如く、「詩經」¹⁾を初めとして「管子」²⁾や「呂氏春秋」³⁾等に「菽」についての記載がある。「菽」とは豆類の汎稱であるが、小豆には別に「荳」といふ稱呼があつたところから、専ら大豆の意に用ひられるやうになつた。⁴⁾

かくて我々は春秋、戰國以前、恐らくは殷代に於て既に大豆が栽培せられ、五穀、九穀、若くは百穀の一として、重要な國民食料となつてゐたことを知り得るが、その主たる栽培地は支那でも北部地方、今の南滿洲に接近せる地方であつたと思はれる。即ち「菽産殷北地」といはれ、殷の北地とは山戎の蟠居せし地方であり、遼東の地を指すものゝ如くである。⁵⁾

従つて南滿洲地方は古くより大豆栽培にとつては自然的條件に恵れ、その耕作が行はれてゐたものと考へねばならぬ。

以上の如く滿洲に於ける大豆栽培の起源は極めて古く、恐らく遼河流域に生活せし民族が農耕を知ると同時にこのことも始められ、狩獵乃至牧畜の傍ら大豆の栽培をも試みてゐたものであらう。その後漢民族が徐々に滿洲に移住し來り、殊に遼河流域は早くより農業地帯化したのであるから、この地方に於ては漢人乃至漢人の手によつて大豆栽培のことも次第に盛に行はれるやうになつたに相違ない。

とはいふものの、その後數千年に亙る久しきの間、大豆栽培の目的はたゞ單に白家用品の生産、即ち大豆の儘食料や飼料として用ふるの外、或は豆腐に製し、或は醬、醬油の原料として使用されるに止つたから、その生産額も少く、勿論、商品としての意味は有し得なかつた。大豆の栽培が盛に行はれるやうになつたのは、それが商品としての價值を有するに至つた以後で

1) 滿鐵調査課、世界經濟界に於ける大豆の地位(滿鐵調査資料第124編)3頁。
2) 詩經大雅生民篇 3) 管子地員篇 4) 呂氏春秋審時篇 5) 同上。
6) 零樓農書 7) 蘇家榮、中國歷史地圖誌

ある。大豆が本格的な商品として賣られるやうになつたのは、さう古いことではない。古くとも一世紀以上は遡り得まい。以下、滿洲大豆が如何にして商品化するに至つたかについて、簡單ながらその経緯を辿ることとする。

二 滿洲大豆の商品化

大豆が商品化するに至つたのは、これを原料として豆油を搾ることが始められて以來である。支那本部では明朝の中期に豆油を搾るの法が知られて居り、殊に毅宗皇帝の崇禎年間に出版された「天工開物」には、煮取法・春磨法・壓搾法の三種の製法まで記載されてゐる。だが當時滿洲でこのことが行はれてゐたかどうかは不明であり、通説では、滿洲在來の油坊は麻油の製造のみを行ひ、大豆を搾油原料とすることは未だ知られてゐなかつた。その初めて大豆を用ふるに至つたのは道光（一八二一—一八五〇年）の初期鐵嶺・長春附近の油坊の發明にかゝるといふが、しかし既述の如く支

那本部では早くよりこのことが行はれてゐたのであるから、恐らく明末か清初頃、移住漢人によつて豆油製造の技術も傳へられたと考へて差支へあるまい。このことは明末清初の資料に據つて書かれたと傳へられる「吉林省志」や「黑龍江省志」に既に豆油に關する記載があるによつても略々推知し得られるところである。

しかし當時の油坊なるものは未だ恐らく糧棧兼營の極めて小規模なものであつたらうことは想像に難くないところで、従つてその需要も地方的な小範圍に限られてゐたに相違ない。當時の技術の段階に於て大豆を原料として製し得るものは、豆油と豆粕に限られて居り、豆油は食料・點燈用・車軸用として用ひられ、豆粕は家畜の飼料に供せられる外、肥料として用ひられるが如きことは未だなかつた。これ滿洲の農民は肥料としては土糞を用ひ、輪作の方法によつて地味の窒素不足を補つてゐた關係上、豆粕の如き窒素肥料の必要を認めなかつたからである。滿洲の油坊が従つてきた滿洲大豆の栽培が一層の發展を遂ぐるためには、この

1) 楚王府奉祠正、本草綱目別錄。
2) 實業部臨時產業調查局、特產取引事情上。

豆油と豆粕の兩方面に對するより廣汎な需要の喚起が必要であつた。しかし前者については支那本部の旺盛な油脂需要が待つてゐたし、後者に關しては十九世紀中頃に矢張り支那本部でその使用が開始せられ、³⁾次いで日本農村が廣汎な市場として登場したのである。

滿洲大豆並にその製品が支那本部へ向つて移出されるやうになつたのは何時頃からであらうか、もとより劃然と時期を指摘することは困難だが、大體營口開港（咸豐十一年、西紀一八六一年）頃から次第に行はれるやうになつたと見て差支へあるまい。開港と共に英國が先づ此處に領事館を設置し、日・露・米・佛等これに續き、同治三年（西紀一八六四年）には海關の設立をも見、滿洲は初めて世界市場と經濟的接觸を爲すことゝなつた。滿洲の物産は遼河の水運を利用して凡て此處に集り、集つた貨物は海路諸方に運ばれ、營口は恰も今日の大連の如き地位に立つた。同治五年（西紀一八六六年）に義泰徳・同興宏の二油坊が設立せられたのを手始めとして、⁴⁾次第に滿洲最初の油坊中心地が形成されてい

つた。しかしこのことは直ちに、滿洲大豆が世界市場と結びついたことを意味しない。その後約三十四・五年の間は豆油・豆粕並に大豆の仕向地は主として中支南支等支那本部に限られてゐて、所謂戎克貿易が行はれてゐたに過ぎない。しかしその移出量も大豆は一五〇萬ピクル乃至三六〇萬ピクル、豆粕は一一〇萬ピクル乃至四六〇萬ピクル、豆油は二萬ピクル乃至二八萬ピクルを上下してゐる状態であつた。⁵⁾されば滿洲大豆の栽培もさして盛大を期待することは出来なかつたわけであるが、やがて起つた日清戦争を契機として日本市場が開拓され、次いで日露戦後に至つて歐洲向輸出が開始せられるに及んで、茲に初めて國際商品化の完成を見、需要の激増は大豆栽培を刺激し、大豆が滿洲農産物中の王座に君臨すると共に滿洲農業は世界經濟の一環として、景氣變動の波動のまに／＼漂ふことを餘儀なくされるやうになつた。

三 滿洲大豆の國際商品化

3) 及 5) The Bank of Chosen, Economic History of Manchuria, p. 216.
4) 滿鐵調査課、滿洲に於ける油坊業、66頁。
6) The Bank of Chosen, of cit., p. 218, 219.

油坊が大豆搾油を始めた當初は、豆油を得るが目的で、豆粕は副産物として僅かに家畜の飼料に供せられるに過ぎなかつたので、工場數の増加と共に豆粕の生産過剩を來し、次第にその販路の擴張が必要となり、先づその需要を中南支に於て見出したことは既述の如くである。然るに日清戰後に至つて日本が有力な需要地として出現した。即ち戰後横濱在住の支那商人が豆粕の對日輸出を始め、次いで三井洋行もこれに指を染めた。當初日本に於ては、豆粕の肥料としての價値について議論があり、農家も亦これが使用に習熟しなかつたけれども、次第にその效用が認められ、輸出も漸次好況を呈し、遂には日本農業をして從來の魚粕肥料より豆粕肥料への轉換を行はしめたこと、周知の如くである。當時日本に於ては滿洲豆粕のことを『牛莊粕』とか『鐵嶺粕』とか呼んだもので、當時の油坊中心地乃至集散地の一斑を推想するに足るものがあるが、殊に營口に於ける日清戰後の油坊業は目覺しき活況を呈し、その數三十に餘り、明治二十九年（光緒二十二年、

西紀一八九六年）英商太古洋行が原料の壓碎に蒸氣機關を利用する所謂半機器油坊を設立したのを手初めとして、これに倣ふもの續出した。¹⁾この種の工場は未だマニファクチュア一の域を脱せず、勿論近代の工場工業の形態を執るものではないが、しかも部分的ではあれ動力機械を採用せし一事によつても、當時營口油坊の活況を想見するには充分であらう。然るに日露戰後日本が南滿洲鐵道を経営し大連を以つてその根據地となすに及び、營口の繁榮は次第に大連に奪はれた。と共に、この頃よりして滿洲大豆の歐洲向輸出が始り、愈々本格的な國際商品化することとなる。

歐洲人が東洋の大豆を知つたのは二世紀も前からである。即ち一七三九年に支那の大豆が宣教師の手によつて巴里植物園に栽植されたのが恐らくその最初であり、降つて一八七三年の埃國維也府萬國博覽會に日本及支那より大豆が出品された。これが同國の學者ハーパーランド (Prof. Harpenden) の研究を促し、一般専門家も亦關心を寄することゝなつた。しかし未だ商品と

1) 前掲、滿洲に於ける油坊業、66頁、及び滿蒙政治經濟提要、233・234頁。

しての價值が認められたわけではない。²⁾ その初めて商品としての需要が生じたのは、今世紀の初頭以來である。この間の経緯に關する從來の通説は、一九〇八年（明治四十一年、光緒三十四年）に三井物産會社が、續いて翌年露西亞商人ナタンソンなる者が、それ／＼滿洲産の大豆を歐洲市場に紹介したのが、そもその濫觴だと爲して居る。³⁾ ナタンソンによる歐洲市場への紹介の事情は明かでないが、三井物産會社に關しては、一九〇八年の五月に同社がリバプールの製油業者に向つて滿洲大豆一〇〇噸を送り、豆油・豆粕の試製を爲さしめたところ、豆粕は家畜飼料として、豆油は石鹼原料として頗る好評を博したので、三井物産會社は同年末更に一萬噸の輸出を爲したといはれて居る。⁴⁾

然るに最近鹽田道夫氏によつて紹介せられた新資料によれば、⁵⁾ 歐洲市場への最初の紹介者は、獨逸商人 Wilhelm Roderwald であり、同人は夙に一八九三年の頃より、滿洲大豆の効用に着眼してゐたが、その後十五年を経たる一九〇七年に至つて初めて試験的に數噸

の大豆を注文し、翌年英國リバプールの Bibby & Sons 會社に無料でこれを使用せしめて見た。ところが同年六月 Bibby は混同飼料粕の製造に成功したので、同氏は早速露支銀行と一〇萬金磅のクレヂットを設定し、哈爾濱より最初一、二〇〇噸、次いでまた二、〇〇〇噸の大豆を取寄せることとし、同年十一月及び十二月の二回に渡つて浦鹽港より積出した。最初の船は翌年一月十四日 Avonmouth に到着し、リバプールなる James Bibby & Sons に賣渡されたといふ。

ところで、こゝに問題となるのは、これと前記三井物産會社との關係である。兩者共に一九〇八年の初めにリバプールの油坊業者に向つて滿洲大豆を試験的に供給して居り、その成績良好なりしところから同年末更に多量の買付を爲したといふ點も共通である。兩者の間に何等かの關係が伏在したのではなからうかと考へられぬ筈もないが、確かな資料を缺ぐを以つて今は推論を急ぐわけにはゆかぬ。後考を俟つ次第である。

2) 三箇功、大豆の栽培(滿鐵農務課編、産業資料共20)12頁。

3) 天野元之助、滿洲經濟の發達(滿鐵經濟調査會)11頁。

4) 前掲、滿洲に於ける油坊業、620頁。

5) 鹽田道夫、大豆對歐輸出の先驅者に就いて(滿洲特産月報第4卷1號)

さるにても、前の鹽田氏の紹介された新資料には、Rodemald の註文品以外に、それが到着してから一ヶ月後即一九〇九年二月にハル(Hull)に於ても滿洲大豆が新しき油脂工業の原料として輸入されたことが誌されて居るし、また本多兵一氏の談によれば、翌一九一〇年(明治四十三年)秋に英商サミュエルが突如來滿して大規模の歐洲輸出を計畫した由であるから、兎に角この頃に至つて滿洲大豆が歐羅巴、殊に英國の油坊業者の注目を惹くに至り、新に世界的商品としての本舞臺に登場し來つた有様が彷彿される。時恰も英國に於ては、從來の製油原料たる棉實、亞麻仁の供給が、印度及び埃及の不作のため、不足を來してゐたので、これが代用品の需要を喚起し、そこに滿洲大豆が乗り込んで來たわけである。

註 The Bank of Chosen, Economic History of Manchuria に引用せる Soya Bean of Manchuria, published by the Statistical Department of the Inspectorate of Chinese Customs によれば、三井物産による五、二〇〇噸の大豆は一九〇九年三月に、これも同じくハル(Hull)に到着

滿洲大豆の發展

して居る。鹽田氏の資料にあるハル入港の大豆は或はこれを指すのではないかと考へられるが、一は二月であり、他は三月である。兩者の間に一ヶ月の差異があるので、連斷は許されない。

かくて英國によつて始められた滿洲大豆の使用は、次いで丁抹・瑞典・加奈陀等にもその販路を見出したが、就中注目すべきは獨逸である。獨逸は一九一〇年既に四萬三千噸の輸入を行ひ、早くも滿洲大豆の顧客としての相貌を現した。たがロンドンに滿洲大豆が初めて現れてから七年目に第一次歐洲大戰が始つた。大戰開始の年(一九一四年)三十萬五千噸に上つた對歐大豆輸出は一九一七年には皆無となつた。これは滿洲にとつては大きな打撃である。しかしその反面、北米合衆國行豆油が激増して、同じ期間に約二倍半に飛躍した。加ふるに日本向の豆粕がこの頃から著しく増加してきたので、大戰開始の初期に於てこそ、輸出系統の混亂のために多少の打撃を蒙つたとはいふものの、結局に於て滿洲大豆の第一次歐洲大戰による影響は殆んど無かつたといはねばならぬ。米國向豆油の輸出が

6) 本多兵一、特産界の回顧(滿洲特産月報、第4卷10號)

7) 前掲、滿洲に於ける油坊業、177頁。

8) 前掲、鹽田道夫氏論文。

9) The Bank of Chosen, Economic History of Manchuria, p. 219.

激増したのは米國の手を通じて油脂が聯合國側に供給されたがためで、従つて聯合國側は大して油脂缺乏に苦むことがなかつたが、獨逸は列國の經濟封鎖に遭ひ、油脂供給の途を斷たれて非常に苦んだ。しかし大戰の瘡癍を恢復した昭和初年頃よりして獨逸油坊業の復活は凄じきものがあり、大豆の加工・利用方面の研究の進むと共に、滿洲大豆に對する需要は逐年激増に次ぐに激増を以つてした。一九二七年（昭和二年）より一九三三年（同八年）に至る七ヶ年の間に輸入量は倍加し、三三年度に於ては世界市場向總輸出の五割三分、歐洲市場向輸出の七割六分の多きを占むるに至つた。¹⁰⁾

原料大豆の對獨輸出激増と共に豆油及び豆粕の輸出も亦増加した。即ち從來さして盛大でなかつた歐洲向豆油輸出も一九二九年（昭和四年）には殆んど對支輸出額に匹敵することとなり、豆粕の日本並に支那本部に對する輸出も大體漸増の傾向を辿つた。¹¹⁾ かくて大豆・豆油・豆粕ともに世界大戰後の十年間に於てその貿易額は著増し、三者を合するときは、一九三一年（昭和六

年）に於ける全滿輸出總額の四割三分に達してゐる。

以上によつて我々は粗雜ながら滿洲大豆及びその加工品が如何にして國際商品化し、外國需要が如何なる具合に動いていつたかに就いて述べた。一度び國際商品化した以上、滿洲大豆の生産も亦世界需要の消長とその振幅を共にしなければならぬのは當然である。

事實滿洲大豆の生産は、これを作付段別に就いて見ても、はたまた收穫高について見るも、一九三〇・一九三一年（昭和五・六年）までは、大體に於て増加の一路を辿つた。先づ作付反別に就いていへば、一九一〇年度の指數六八より一九三〇年には一九一と飛躍し、¹²⁾ 他作物との作付歩合も、同じ期間に二割三分より三割へと増加し、¹³⁾ 收穫高に於ては矢張り同時點に五二の指數より一五四と上り、¹⁴⁾ 如何に發展の目覺しきものがあつたかを物語つてゐる。かくて滿洲大豆の産額は、一九二八—一九三二年平均に於て、支那を除外すれば、全世界産額の七割六歩、支那を含むれば三割九歩の多きに上つた。¹⁵⁾

10) 滿洲經濟年報、1935年版、163頁。

11) 前掲、滿洲に於ける油坊業、614、615頁。

12) 鈴木小兵衛、滿洲の農業機構、188、189頁。

13) 同上、186頁。 14) 同上、190、191頁。

15) International Institute of Agriculture; International yearbook of agricultural

然るに一九三〇・一九三一年（昭和五・六年）の交を頂點として爾後は停滯、いや漸衰の兆候をさへ示すに至つた。それには種々の原因があらうが、先づ舉げらるべきは、一九二九年（昭和四年）末に始つた世界經濟恐慌である。だが銀塊相場は暴落は暫く滿洲大豆をこの恐慌の慘禍より護る防波堤たるの役割を務めたため、一九三一年（昭和六年）まではその影響より免れることが出来た。時に突如として滿洲事變が勃發し、全滿を混亂の渦中に包んだ。翌年（昭和七年・大同元年）には松花江の氾濫に基く北滿の大凶作が起り、一九三四年（昭和九年・康德元年）には全滿を襲ふ大規模の凶作があり、東滿地方の被害は殊に大であつた。かゝる自然的災害の襲來と世界恐慌の波動とが重疊し、加ふるに國內擾亂に基く匪賊の跳梁するありて、滿洲大豆の耕作が極度に萎縮せざるを得なかつたのは、蓋し已むを得ないであらう。

時恰も獨逸はナチス經濟の統制政策によつて大豆の輸入を抑制し始め、支那は一九三二年（昭和七年）滿洲

滿洲大豆の發展

國に對して報復的高率關稅を賦課し、爲めに中南支向の輸出は激減した。剩へ豆粕の最大顧客たる日本に於ては、競争窒素肥料たる硫酸の進出に伴ふ打撃の外、農村恐慌の對策として金肥より白給肥への轉換が叫び出された。搗てて加へてアメリカ大豆の急激なる擡頭のあるありて、このところ悲觀的材料のみ集積し、さしも大戰後十年間その黄金時代を誇つた滿洲大豆も、今や何處を見ても、打開の途なき窮境に追込められたかに見えた。『豆を大連に出すよりも、石炭に混せて焚いた方が得だ』といはれたのは恰もこの頃である。

四 滿洲建國と大豆政策

王道樂土を目指す滿洲國はかゝる際に呱呱の聲を擧げた。建國一周年を期して發動せられた滿洲國經濟建設要綱は順天安民の大旗を高く掲げ、『我國民經濟は農を以て其根幹とす』と宣言した。しかして先づ農業恐慌の應急策として、義倉制度の復活による穀物貸付と平糶會の組織による資金の貸付、及び特産共同販賣會

statistics (1938-1939) p. 345.

1) 滿洲經濟年報、1935年版、336—340頁。

の設置による中間商業資本搾取の排除等が試みられ、更に恒久的對策としては、金融合作社の設置によつて農村金融の合理化を圖ると共に、作物の轉換が提唱されることとなつた。³⁾作物の轉換とは大豆作を抑へ、棉花・小麥・麻・甜菜・煙草等の特用作物を奨励せんとするもので、蓋し一方に於て大豆の國際商品性が齎すところの滿洲經濟の他律性を除去し、他方に於ては日滿ブロックの自給自足を圖らうといふ一石二鳥の意圖に出づるものである。この意圖は次いで一九三七年（昭和十二年・康德四年）より着手せられた滿洲開發五ヶ年計畫に於て更に鮮明に描き出された。尤もこの計畫に於ては、國民生活安定の見地よりして高粱・粟・玉蜀黍等と共に、大豆の増産も指摘せられてゐないではない。だがその第一年度の計畫作付面積の如きは明かに減段が規定せられてゐて、特用作物のために大豆作減少部分が割當てられた型になつてゐる。⁴⁾これは明かに作物轉換の意圖を物語るものであり、産額の増加は作付面積の増加によるのではなく、品種の改良其他によ

る經營の集約化によつて行はんとするものである。^{（註三）}

註一 康德四年に設立された農事合作社は農業上のあらゆる指導と農家經濟合理化のための機關たるを目的とするものであるが、その事業の一として交易場を設け農產物取引の改善に努力してゐる。これは特産共同販賣會の趣旨を發展的に繼承せるものと見るべきである。しかして農事合作社は金融合作社との合體によつて更に發展を維持されつゝあることは周知の如し。

註二 大豆の品種改良について忘るべからざるは滿鐵會社の功績である。滿鐵會社は大豆・豆粕・豆油について所謂混合保管制度なるものを設けその取引上の圓滑を圖つてきた一方に於て、亦品質改良についても中央試驗所・公主嶺農事試驗場等に於て二十數年來これが研究と普及に努力してきた。事變以後は滿洲國產業部農務司と協力してそのことに當り、康德二年に至つて改良種「黃寶珠」の作付は約四百萬陌に達した。⁵⁾

しかし五ヶ年計畫は第一年度を經過したのみで大修正を行ふことを餘儀なくされた。それは一は支那事變によつて擴大された東亞ブロックの實情に即應し、日滿を一體として北支をも考慮に容れた生産力擴充必要のためであり、他は五ヶ年計畫立案後に於ける各方面

2) 同上、1934年版、330頁。
3) 同上、333頁、及1935年版471頁以下。
4) 同上、昭和12年版下、151頁。
5) 同上、昭和12年版上、18頁。

の調査探究の進行に伴ひ、資源の賦存狀況或は物資の需給關係等が漸次明確さを加へ、その結果として當初の計畫に對し改訂の必要を生じたがためである。しかしてこれを大豆に就いて見るに、そこには次の如き政策上の變化が認められる。即ち既述の如く、五ヶ年計畫原案に於ては大豆の増産が單位收量増加を意圖したに對し修正案では急速なる増收を圖らんがため、作付面積の擴張が必須とされたことで、これに對し滿洲國政府は開發に必要な資金を農民に貸與すると共に、農業労働者の補給については入滿勞力の制限を緩和することとした。かくの如きは當初大豆の單一耕作より多角耕作への轉換を意圖した政府の政策としては一大變化を意味するもので、その原因は日滿國際收支一體の見地より滿洲國側に負はされた輸出振興による外貨獲得にあるものと見ねばならぬ。大豆は滿洲國の對第三國輸出品の大宗たる關係上、輸出増進を圖らんとすれば、勢ひ大豆輸出の積極的増進策を採らざるを得なかつたわけである。

滿洲大豆の發展

大豆及び其加工品が事變後漸減の傾向にあつたことは既述の如くであるが、一九三六年（昭和十一年・康德三年）頃より好轉の兆が現れた。これ同年四月締結された滿獨貿易協定の影響や、日本に於ける硫安市價の昂騰・農村自給肥料の減退等にその因を求め得られよう。かくて大豆を中心とする特産物貿易は好轉したとはいふものの、未だ事變前には及ばない。然るに第三國貿易の振興は焦眉の急に迫つてゐる。從來の如き輸出業者の活動のみに委せて、輸出伸張を期待するには餘りに事情が切迫してきた。大豆の増産を圖る一方に於て、その生産物の合理的配給統制が問題として日程に上るのは自然の數である。昨年（康德六年）十一月一日を以つて創設せられた滿洲特産專管公社はかかる要求から生れた。しかし大豆は國際商品である。國際事情の變動によつて需要は動搖し國內工作のみを以つてしては如何にもすべからざる面を持つ。殊に第二次歐洲戰爭が突發したる今日に於て、對獨輸出が順調に續けられ得るや否やに就いては多大の懸念がなければなら

ぬ。これ他方に於てその加工に留意せざるを得ない理由である。今や大豆化學工業會社はその誕生の前夜にある。大豆の用途は最近自然科學の進歩によつて著しく増大した。戰時體制下に於ける所謂代用品時代に於て大豆の持つ『魔法の豆』としての機能は遺憾なく發揮せられざるを得ない。大豆化學工業會社の設立に大なる希望がかけられる所以である。

(昭和十四年十二月末日新京至善路假寓に於て撰筆)

附言

第二次歐洲大戰の結果滿洲大豆が生産過剰に苦しむであらうとの一般の豫想は、其後の經過によつて見事に裏切られた。大豆の出廻りは迎々として進まず、輸出向は愚か、國內需要にすら應じ得ざる現狀である。この原因は奈邊にあるか、これについても論ずべきものは多々あるが、それはさて置き、國民經濟の見地より見て、現狀の儘に放置するの不利なるは云ふまでもない。従つて問題の本筋は依然として本論述ぶるが如き邊りに横つてゐると思ふ。加之、本稿の主たる目的は沿革の敘述にあるので、其後の經過如何に拘らず、敢て梓に上する所以である。